

はじめに Ⅲ

いま全国的に「まちなかカレッジ」と言われる取り組みが広がっています。この取り組みは、「まちなかキャンパス」や「コミュニティカレッジ」などと呼ばれることもありますが、共通しているコンセプトは、「まち全体を1つの学校（キャンパス、カレッジ）にとらえて、『教える』『教わる』という従来の学びのかたちにとらわれず、自由で楽しい学びのまちづくりをめざす活動」となっています。具体的には、まち全体のさまざまな場所や地域で、だれもが先生になり、だれもが生徒になる、立場を固定化しない自由な活動を「まちなかカレッジ」では行っており、まさに「学び合い」です。活動は行政が行ったり、援助したりして

特集

「まちなかカレッジ」が創る学び

いる場合もありますが、多くは民間の有志で実施しています。

このような活動が広がっている背景には、まちの1か所に集まって、先生から教える「乞う」ような、従来の学校型の学びではなかなか収まらない学習欲求が増えてきているのではないのでしょうか。

公民館も戦後初期のころは「青空公民館」と呼ばれる、施設内にとらわれない、活動中心の公民館が多くあり、まちの至る所で学習活動を展開していました。しかし、公民館が全国的に普及しはじめ、立派な建物ができると、公民館はだんだん施設外での活動をしなくなり、公民館職員も外へ出かけて事業を行うのではなく、向こうから来ることを待つ姿勢が目立つようになりました。

公民館のなかには、利用者が固定化している、管轄している区域の数%しか利用していないといった嘆きを聞くことがあります。その背景にはさまざまな要因があるかと思いますが、それらを改善するヒントとして、「まちなかカレッジ」の取り組みはたいへん示唆に富むのではないかと考えています。

今月号は「まちなかカレッジ」の事例と、第一線でご活躍の方々による座談会です。明日からの公民館活動の一助となることを願っています。
(『月刊公民館』編集部)



「まちなかキャンパス」が創る学び

いま、全国的に「まちなかキャンパス」と呼ばれる活動が活発になってきました。特定の場所に集まるのではなく、まちのさまざまな場所が学びの場となるのです。

公民館も、館内だけが学ぶ場ではありません。施設がなく、活動だけの「青空公民館」や、活動を館外に移動して行う「移動公民館」などの名称で呼ばれる公民館活動も昔からありました。でも、最近は公民館のなかで活動することが多くなってしまいました。そこに公民館の大切な何かを見落としてしまっているのかもしれない。

この座談会では、東京都渋谷区を舞台に活動している「シブヤ大学」学長の左京泰明さん、そして千葉県柏市を舞台に活動している「柏まちなかカレッジ」学長の山下洋輔さん、コーディネーターに牧野篤さんをお迎えして、各「まちなかキャンパス」の状況や、そこから見えてくる学習者のニーズ、そしてこれからの公民館のあり方についてなど熱く語っていただきました。

座談会参加者のプロフィール

○牧野 篤（まきの あつし）：東京大学大学院教育学研究科教授

愛知県出身。まちづくりや高齢化と過疎化問題に関心がある。最近では、自治体と一緒に公民館や生涯学習の共同調査を行ったり、多世代交流型コミュニティの構築を進めたり、さらには企業と一緒に「ものづくりの社会化」プログラムなどを運営したりするなどの実践ベースの調査・研究を進めている。

○左京 泰明（さきょう やすあき）：シブヤ大学学長

1979年、福岡県出身。早稲田大学卒業後、住友商事株式会社に入社。2005年に退社後、特定非営利活動法人グリーンバードを経て、2006年9月、特定非営利活動法人シブヤ大学を設立、現在に至る。著書に『シブヤ大学の教科書』（シブヤ大学＝編 講談社）、『働かないひと。』（弘文堂）がある。

○山下 洋輔（やました ようすけ）：柏まちなかカレッジ学長、柏市議会議員

1978年、大阪府出身。元高校教諭。学校教育だけでは解決できない課題に直面し、地域や議会から働きかけてきた。地方議員の教育政策研究のネットワークである（社）教育共創研究所代表。著書に『地域の力を引き出す学びの方程式』（水曜社）がある。

「柏まちなかカレッジ」について

牧野 本日はどうぞよろしくお願ひいたします。まずは、山下さんの実践されている「柏まちなかカレッジ」の活動について、ご紹介ください。

山下 私は元高校教員でした。教育は、学校のなかだけではなく、地域全体が学校をサポートし、学校も地域にもっと出て、地域を元気づけるようにしたいと思い、立ち上げたのが、柏まちなかカレッジです。2009年に柏市が主催した「市民活動講座」で私が講師で招かれて、その講座後の懇親会がきっかけで、実行委員会が立ち上がって、2010年から開校しています。

それ以来5年ちょっとで、延べ220講座くらい、教室としては、飲食店だとか、美容院だとか、そういうところを中心に70か所くらい使わせていただいています。受講者は4月の段階で2,800人を超え、現時点では3,000人くらいになると思います。

私たちの柏は東京から電車で30分という、都心に近い地域なので、都内で活躍していても地元で何をしているかわからないという人がたくさんいます。そういう人たちを講師にお願いすることで、柏のまちの人的な資源を引き出していると感じます。また、飲食店や美容院の人たちにも場所を提供するだけでなく、講師も引き受けてくれる方が多くいます。延べ120人くらいの方々に、講師になっていただきました。

経費は、500円ずつ参加費をいただ

いているので、そのなかで運営ができるようにしています。たいていは6人~15人くらいは毎回、来ています。講師の方に、謝金を払わない代わりに、交通費として一律に3,000円を払うようにしていますので、6人くらい来ればまかなえます。会場はお店などにご協力いただいているので、会場代はかかりません。10人来れば蓄え、参加者が少ないときを補填しています。たまに、30人~70人くらいの大きなイベントもします。何かイベントをするときは貯めていたお金を使っています。

講座は単発が多いですが、シリーズものもあります。デザイン未来塾や魁！歴史塾といったもので、江戸時代の私塾のような感じですね。一方で、講座からプロジェクトを立ち上げてスピニアウトしていった活動もあります。朝の読書会、ストリートで古本市、高校生のプログラミング教室、料理教室ではなくて農家の方や消費者、飲食店と一緒に理解し合う交流の場や食育活動など、さまざまな活動や団体が生まれました。運営からどんどん手放していきたいし、そういう動きはむしろ、喜ばしいことだと思っています。プロジ



牧野篤氏

エクトをとおした学びをつくっていきたくないと考えています。

講座内容は実行委員会で決めていくもの、やりたい人が持ち込んでくるもの、出会いの中でやってみようと盛り上がり企画されるものがあります。

牧野 受講された方々から、いろいろな活動が生まれてきているのですね。

山下 私たちの講座を受けたからというよりは、もともとそういうことをやりたかったけれども、「まちなかカレッジ」できっかけをつくって、そこから自立してできるようになったという人が多いですね。やる気がある人がいても、仲間がいなかったり、場所がなかったり、そういう課題があって活動できなかったのが、「まちなかカレッジ」が最初のきっかけをつくっただけと思います。

牧野 行政との関係はいかがですか。

山下 行政からは独立しています。行政と連携していない分、思い立ってすぐ実践できるスピードや自由に企画できる柔軟性が強みとなっています。設立当初から市長も注目していて、柏まちなかカレッジを参考にして、行

政では、かしわ市民大学を設立しています。

「シブヤ大学」について

牧野 左京さんのシブヤ大学ですが、山下さんのまちなかカレッジと、活動は似ていますか？

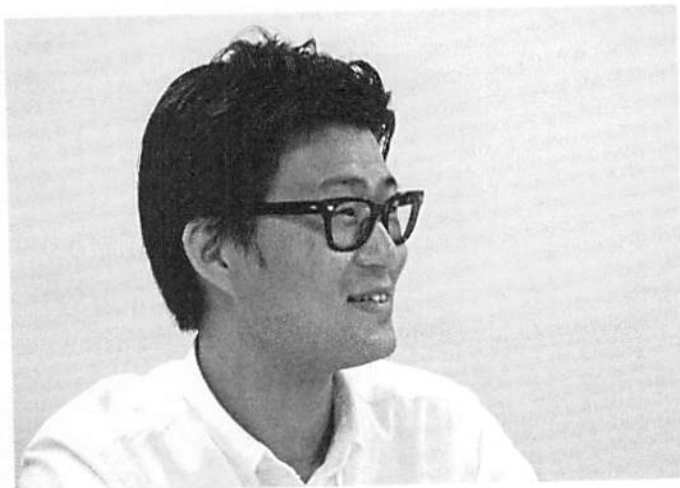
左京 活動の内容の部分は重なるところが多いと思いました。ただ、渋谷のまち自体と柏市との特色の違いや、活動の規模などは異なっていますね。

シブヤ大学は、もともと2004年に渋谷区の区議会で、一人の議員さんが新しい生涯学習事業として提案した、渋谷区立シブヤ大学が、いまの元のアイデアとなっています。

その後、発案者であった区議の方をはじめ、私やそのアイデアに可能性を感じた有志が集まり、行政主導ではなく、民間主導でNPO法人として立ち上げていき、そこで渋谷区が連携していくという流れで設立されました。2005年に準備を始め、2006年9月に活動をスタートして、今年の9月で丸9年になります。

基本的な活動のコンセプトは、1つが特定の校舎を持たずに、渋谷のまち全体がシブヤ大学という大学のキャンパスであること。もう1つが特定の先生がいないこと。僕らはだれでも先生であり、生徒であるということです。この2点が大きな特徴です。

2006年から現在までで、9月でちょうど1,000講座になります。先生の数も9月でちょうど1,000人くらいです。延べ参加者数で言うと、9月で3万人



山下洋輔氏

になります。またホームページから学生登録ができるんですが、登録は2万3,000人おります。月に平均して10講座、年間で100講座～120講座なので、年間3,000人～4,000人が参加されています。応募は定員を上回っており、講座は3倍から4倍程度の倍率で、いまは抽選制になっています。

いまシブヤ大学の大きく活動は3つに分類していて、まず「シブヤで学ぶ」として、さまざまな授業を市民に対して行うということ。2つ目が「シブヤで遊ぶ」として、授業をきっかけに立ち上がった自主活動グループ（ゼミやサークルと呼んでいます）のサポートの活動です。現在、社会人クワイアなど約10団体が活動しています。参加者数は400人～500人程度だと思います。3つ目が「シブヤをつくる」として、まちづくりの活動です。これは私たちが意図的に始めたというより、活動していくなかで自然につながったという側面もあります。たとえば、商店街の方々が、地域の盆踊りなどの祭事の人手が足りないという相談を受け、シブヤ大学だったらどのように解決できるかということを皆で考えてサポートしています。あるいは、地域の商業施設から、いわゆる商業的な祭事でなく、地域にもっと根づいた、地域に喜んでもらえる祭事をしたなどの相談を受け企画した催しなどもあります。

そういったシブヤ大学の運営のノウハウについて、僕らはオープンソースと考えています。一番はじめは京都の方から、京都でも同じコンセプトで活動をしたいと相談があり、次第にそういった相談が増え、京都、札幌、



左京泰明氏

名古屋と続いていきました。あまりにも増え、行き来の交通費だけでも多額の費用がかかるので、2年間、「シブヤ大学の作り方学科」というノウハウを共有する講座を企画し、全国で地域大学でつくろうとしている方に東京に来てもらって、一緒に勉強して、私たちが現地に行って手伝うというプログラムを行いました。そうして立ち上がっていったのが、札幌から沖縄まで9地域に広がっている姉妹校という活動です。

参加動機は「学び」だけではない

牧野 規模や方法は違いますが、「まちカレ」のような方法は全国的に高まっているのでしょうか。既存の社会教育・生涯学習行政が行うような、公的な社会教育・生涯学習に対して、市民がもっと自由な学びをまちなかで組織していくとか、自由に学びたいという要求が強まっていると感じますか。

山下 インターネットで何でもモノを買えたりする時代ですが、そういう時代だからこ

そ、ここに来て食べたいとか、ここに来て髪の毛を切ってもらいたいとか、お店の人と直接話して、まちの一員になれるという場所をつくっていくというのが、いま求められているなと感じます。学びたいという意欲とは、それはまた違ったものかもしれません。

左京 そういふのはありますね。動機のなかには、参加する講座そのものに興味があるという人もいますが、会社などその人の日常生活を通じて出会える人とは違ったバックグラウンドを持つ人と出会ってみたい、話を聞いてみたい、意見交換してみたいという気持ちがある。1つの授業をきっかけに、そこで出会った人間関係が継続していく。友だちができたり、仲間との出会いを期待しているといったことはアンケートなどを通じて伝わってきます。

牧野 まちのなかで講座をしたりとか、サークルをつくったりとか、そういう活動って昔からありましたよね。ただ、社会全体がサラリーマン化し、都市化していく過程で、そういう学びの実践が見えにくくなってしまった。他方、行政の社会教育・生涯学習で講座を提供すると、基本はやはり趣味や教養がベースになってしまう。そこで、そうではないあり方、もっと市民がやりたいことができるようにしたいということで、「まちカレ」ができてきたと思うのです。つまり、「学び」が知識や教養を身につけることだけではなく、人間関係をつくるとか、居場所をつくるという活動と結びついていて、「学び」に帰属意識、仲間意識などがいろいろ絡まってきたように感じています。その過程で、新しい「まちカレ」というものの需要ができてい

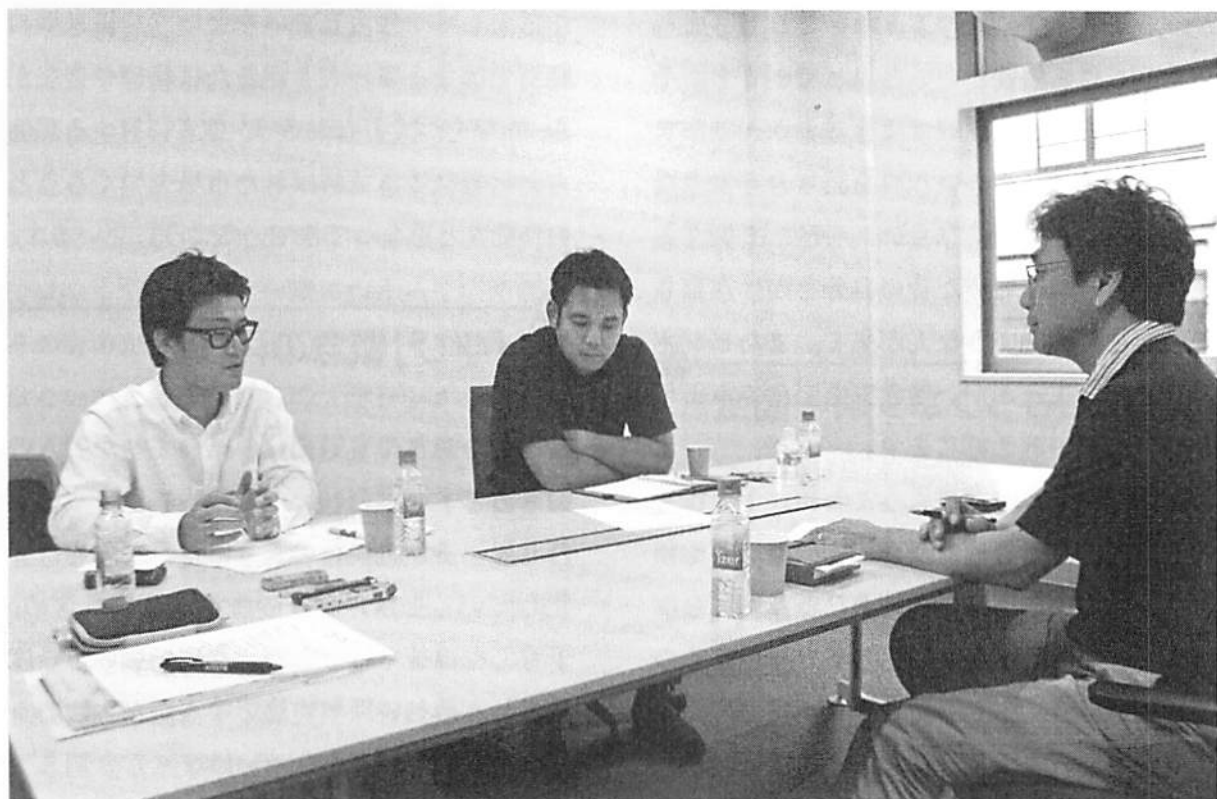
なという印象です。

山下 2009年の段階で、私たちは実験的にいろいろと企画をしてきました。最初につくったものは、趣味的なものだったり、知識をみんなに披露するようなものから始めたんですが、それだけだとあまり深まりがなかったんですね。その後、哲学的な対話やプロジェクトとおした学びが企画されるようになり、自分自身や社会に向き合うようになりました。私たちの「まちカレ」に来ている動機は、もっとまちに入っていきたいとか、まちや人とかかわりたいとか、自分で参加したり、何かをつくり出したいという特徴がありました。何かやりたいけれどもやれない現状を、まちカレに来て、出会いを見つけて、あるいは人と対話をとおして深めていって、その対話のなかで仲間ができて、そこから何か活動をやっていこうという試行錯誤の学びがありました。私たちもあえて、そういうふうになるように企画してきました。

牧野 何かしたいけど、どこから入ったらいいかわからないとか、とっかかりがわからない人たちが「まちカレ」と聞いて、あ、ここに行けば、何かきっかけができるかなと思ってかかわり、学ぶことで、さまざまな関係ができていって、次に展開していく、ということですね。結局、まちにかかわりたいとか、もっと社会に触れたいとか、そういうことがベースになっているのでしょうか。

きっかけは仕事の悩み

左京 自分がシブヤ大学を始めようと決意した背景に、会社員時代、自分のキャリアにと



でも悩んでいた時期の経験があります。悩んでいても、いきなり会社を辞めてしまうといったことはできないというときに、大学時代の友人たちと小さな勉強会を始めました。毎週1回、朝7時にカフェに集まって、それぞれが興味があるテーマについて発表し合うという形式でした。そのとき、自分はいまにつながるNPOやソーシャルビジネスというテーマに出会いました。一方で、当時の仕事に対する悩みをだれに相談するかというとき、会社のなかでも家族にも言えませんでした。でも、その勉強会の仲間にはそれを素直に話すことができました。これは僕にとって得がたい場でした。自分以外のメンバーも、新しいことを知るだけでなく、その場の人間関係自体にも価値があると感じていると気づきました。

この経験はシブヤ大学を立ち上げるにあたり、だれの、どういったニーズに対し、どのようなサービスや価値を提供していくのかという視点を確立するうえで重要なものとなりました。また、まちなかカレッジ的な活動が全国に広がっていった背景としても、一定の共通項としてあるのではないかと考えています。

また、この広がりについて気づくことは、シブヤ大学の姉妹校も含め、実は生涯学習や社会教育をバックグラウンドを持つ人々による活動というより、まちづくりに立脚点を置く人や組織が中心となっているところが多いということです。

山下 いまのお話をお聞きして、キャリアとか人生を考えることと、まちづくりについて考えることというのは、私たちも似たようなところがあります。コワーキングスペースと

か、シェアオフィスのようなところと「まちカレ」って、相性がいいと思っています。そこで働き方とか、地域で生きるとか、シェアする文化とか、そういうのを語り合うような広がりになってきています。そこに集う人が、きっと悩んでいた昔の自分とか、左京さんの会社時代のような人が来て、またビジネスをしてみようとか、働き方を変えてみようという人がいると感じます。

牧野 話をうかがって思うことは、1つは日本が過去、高度経済成長を経て、市場が飽和して、80年代なかばから一人ひとりがばらばらになって、価値が多様化していった。その過程で「自分探し」がおこって、内面のほうに向かっていってしまった。そこでは、自分なりに社会でどう生きていくかを考えなければならなくなってきた。もっといえば自己責任社会になっていくことで、ロールモデルを得にくい社会になった。

こういう社会を背景として、もっと人と触れ合いながら、自分をきちんと社会に位置づけたいという欲求が出てきて、それに「まちカレ」がうまくマッチングした。こういうことなのではないでしょうか。

自分探しが、自分に向かっていくのではなく、社会化され、開かれていくことで、自分というものを社会にきちんと位置づけていく。こういう欲求が人々の間に生まれたのではないか。それが、学ぶということから始まって、まちづくりへ、ハードではないソフトなまちづくりに広がっている。こんな感じを受けます。

そうしたことが、たとえば経済のことを考えると、個人が競争し合って、強い個人が富

を拡大して、独占していくという、従来型の経済ではなくて、人々が新たに結びつきながら、市場をつくりなおそう、他者に対する想像力と信頼によって結ばれた市場をつくろうという動きと重なってきているように思います。

「学び」概念の再検討

左京 わかりやすい変化の例の1つが個人の働き方ですが、それは全体に当てはまることだと思います。現在のように社会が急速に変化していくとき、我々の生活、仕事も含め、子育てや福祉や教育など、すべてをいま一度見直し、新しい環境に適応するかたちにアップデートしていかなくちゃいけません。個人レベルでも、社会レベルでも模索している時期に、学びの場が、変化に適応しようとする人々から求められています。

山下 私も2月に「まちカレ」の全国的なイベントを神戸で開き、全国各地から30校くらい来しました。都市計画やまちづくりをめざすカレッジだったり、公民館が主催しているカレッジだったり、アートや専門性を持った人たちがつきつめて始めているカレッジだったり、さまざまでしたが、でも向かっている方向は、教育の面からでも、福祉の面からでも、都市計画の面からでも、人や社会の結びつきをつくる活動に向かっているんだと感じました。

牧野 いわゆる産業社会つまり工業化社会が終わって、価値観が多様化していく次の新しい社会では、自分の存在そのものが揺らいでしまう面があると思うのです。それをどうにかしなければという人たちがつくったものが、「まちカレ」という活動で、カレッジと

いうと教育とか学習と聞こえますが、でも実は教育や学習という概念そのものを変えなければならぬと思うのです。知識をつくり出したり、伝承すること、それをだれかに伝えていく、上から下におろしていくという関係ではなくて、社会を一緒につくっていくことそのものが「学び」なのだということなのではないでしょうか。この「学び」が、生活をつくることにもなるし、新しい市場をつくることにもなるし、新しい経済をつくることにもなっています。それを包み込んだ活動として、「まちカレ」になったんだと思います。そういう時代に入ったのでしょうか。

他方、学校という制度は、近代産業社会つまり工業化社会がつくり出したシステムです。いまや、近代産業社会が終わろうという時代に入っています。学校という教え教えられるというシステムが、うまく機能しなくなってきたのです。新しい社会が要請しているのは、その社会そのものをつくり出すことではないでしょうか。市民自身が自分たちの居場所をつくりながら、社会そのものをつくり出していくこと、これこそが、新しい「学び」のあり方なのだと思います。

山下 私も学校で教員をしていた経験から、社会全体にどのように働きかけていくかを常々考えてきました。ただ、人に説明するときに、「教育」とか、「学び」という言葉で説明していくと、みんなの固定概念というか、知識教養をつけて、世の中に役立っていくということになってしまって、なかなか説明がむずかしい。いろいろなことを経験して、社会を変えようという活動のなかで、自分も学んでいき、それをどう社会にいかしていく

か。それは、子どもの教育だけではなくて、サラリーマンだったり、女性だったり、高齢者のための活動でもあります。どう自分たちに反映させて、自分たちの社会がよくなるのかということ、うまく発信できたらいつも悩んでいます。

全国一律でなくてもいい

牧野 それこそが、「まちカレ」が全国的に広がらない理由なのではないでしょうか。多くの人たちが、教育については固定観念を持ってしまっていて、そこから抜け出せなくて、新しいコンセプトを受け入れられないという面があるのかもしれない。そうしたことが、「まちカレ」みたいな新しい取り組みの制約になっているのでしょう。

左京 教育には人格教育といわれている面や、知識を習得し技術を磨いていくという面の役割もある。シブヤ大学の役割はというと、個人の幸福実現のための機会を提供することだと思っています。よって、すでに充実した毎日を送っていてそれを必要としない人には必要とされなくてもいい。それを必要とする人に届けたいし、その時必要とする人もいろいろな機会を経て、必ずしも必要となくなればいいと考えています。したがって、とにかく多くの人にサービスを提供すべきだとは思っていません。

牧野 多様でいいということですよ。ある意味では。広がっていくのであれば広がっていくのでいいし、広がらなければ広がらなくてもそれでもいいという感じではあるんですね。

左京 はい。よって参加者数の目標なども、単に右肩上がりというより、ニーズがある分だけ、必要とする人の分だけその活動を広げたいと考えています。

牧野 私たちも大学で教えていて、ひっかかる問題は、概念なのです。たとえば、教育ってこういうシステムであるべきだという、「べき論」で話してしまっているのです。「べき論」の何が問題かという、全国一律でそうすべきだという話になりやすいんです。

いま国家を単位に考えているので、そうあるべきだという議論になってしまいますが、左京さんがおっしゃったように、いやそうじゃなくて、それぞれ地域でやっていけばいい、人のニーズが違うんだから、人が求めるものでいいといえ、異質でいいという話になりますよね。それが新しい社会なのかなと思います。

そう考えると、全国一律にそうすべきじゃなくて、そうしたい人が集まればそうすればいいし、もっと多様化していくというか、そういうふうにも考えてもいいと思います。

公民館も講座を開いてきましたが、同じような問題があるのではないのでしょうか。まちづくりのあり方も、いままでだったら、経済とか金儲けとかを、会社のために、国のために一生懸命働いて、富を得れば、自分にも還元されるという思いでとらえていたことがあったと思います。でもいまは、ベクトルが逆になってきていて、個人の幸せとか生きがいとかを考えていくと、結果的に地域が元気になったり、会社が新しいものをつくり出したり、社会が変わっていったりというように考えていかないと、もうダメなんじゃない

いかという時代になってきているようです。そこでは、個人の幸せや生きがいというものが、個人のニーズではなくて、個人が他者と一緒に生きているという関係のなかで生まれてくるものだということが大事なのです。でも、そこをうまく転換できないというか、個人の生きがい、幸せは個人のものだと考えることや、日本全体一律にそうすべきだと考えること、こういう工業化社会の観念にまだにとらわれているのではないのでしょうか。このような観念に基づいて、地域コミュニティをどうすべきかとか、自分の所属している会社をどうするかということをいまだに議論しているように見えます。ベクトルが逆になってきているのに、転換できていない。ここに大きな問題があるのではないのでしょうか。

公民館のイメージ

牧野 さて、公民館のイメージって、どういう感じでしょうか。

左京 まちづくりの起点ともなりえる可能性があるにもかかわらず、古くからのやり方にとらわれ過ぎていると思います。地域における場に対する市民のニーズは非常に多様なものがあると思いますが、それらを公民館事業はとらえられていないのではないかと。機会があればいまの時代にあった公民館をプロデュースしたいと思います。

山下 私は「公民館」という名前がすばらしいなと思っていて、「公民（シチズン）」の「館」、わざわざ「公民」という名前を付けている。よくある「フューチャーセンター」などは、まさに本来は公民館のすべきことなん

じゃないかと思います。いろいろな人たちが集まって、自分たちの地域のことについて、当事者として取り組んでいく。そのための拠点となるような場所が公民館ではないでしょうか。単なる貸し館業ではなく、いろいろな講座や活動で、公民館に来ることで、市民として何をしていくかというのを話し合える。あるいは公民館に来ると、意識が変わっていくような、そんな場所になってほしいなと思います。私も公民館長もあこがれます。プロデュースしていくというのは魅力的な、可能性のあるものだと思います。

左京 たとえば、渋谷のまちにおけるコンセプトとして人材育成があると思います。若い才能がそこで活動を始め、やがて目が出て花開き、渋谷のまちから日本中、世界で活躍していく。そういった仕組みを意図的に、環境を整備し、促進していかなければいけないと思います。しかし現実には、渋谷で何かの活動のためのスペースを借りようとしたら、あまりに高く借りられません。その解決策の1つとして、たとえば公民館のような公共施設を活用することができないでしょうか。民間企業によるビジネスでは成り立たないことも、行政であれば可能な仕組みがあると思います。でも、実際には、昔からの住民を中心とした一部の人しか使用できておらず、行政としてもそういう人たちしか市民として視野に入っていないのはもったいないことだと思います。

これからの公民館の在り方

牧野 ある自治体で、首長が公民館をやめて

生涯学習センターにしたいと提言をしたら、議会でものすごく反対をされたそうです。いろいろ聞いていくと、反対した議員たちは利用者団体たちの反対に遭っていて、どうしていままで私たちが使えていたのに、公民館をやめてしまうのかという訴えを受けていたのだそうです。これまでの利用者をないがしろにして、どうしてもっとたくさんの市民に開かなければいけないのか、ということのようです。既得権益化してしまっているのですね。首長としてはもっと市民に使ってもらいたいし、市民自身がそこで学ぶことによって、もっと行政に参画してくるとか、まちを自分たちがつくっているという意識を持ってもらいたいと思っている。でも、いまのままの公民館だとそれができない。だから、生涯学習センターに変えたいということだったのです。

一部の社会教育関係団体が既得権益化してしまっている面は、どうにかしなければならぬと思います。もっと開かれていくことが、公民館に求められているのではないのでしょうか。

山下 公民館でなくてはできないということがあります。まちだったら、ある属性があって、そこに同じ属性の人たちが集まりやすいのですが、そこをあえてごちゃごちゃにできるというのが公民館の良さだと思います。どこを中心に据えるかは、地域ごとに違って、子どもだったり、若者だったり、食べ物だったり、高齢者だったり。そして年ごとに企画して、重点的に取り組んでいって、腰を据えてかかわった人がその地域のことをよりよくしていきたいと集まってくるような、そういうことが本来の公民館だと思います。

牧野 青空公民館がかつてはあったのですが、戦後の構想のなかでは、もっと地元の社会をどう活性化するか、人々の居場所とか、産業振興なども考えてどのように生活改善していくかなどが公民館の目的だったのです。それが都市化して、経済発展していく過程で、公民館の活動内容が縮小してきて、どちらかという趣味・教養講座を提供する場所というイメージになってしまいました。そういう意味では、まちなかカレッジを發展させるためには、もう一度新しい社会をつくっていくための拠点として考えていく必要があるのだと思います。

左京 僕らはソフトだけで活動していますが、ハードの有効性を痛切に感じます。ソフトの場合、ある事業は一時的に現れる人の集合であり、そこには何時もだれかがいるわけではありません。そういう意味で、ハードは、ソフトだけでは担えない部分を担うことができます。したがって、今後公民館は従来からの公民館としての役割だけでなく、より目標を高く持ち、地域の価値を向上させたり、地域再生や都市経営課題の解決のための起点になっていくといいし、なれると思います。そのとき、たとえば我々がやってきたようなソフトの活動との組み合わせは非常に可能性があると思っています。

ほかに、運営方法として、従来の指定管理者制度等のみならず、コンセッション方式のような方法を取り入れ、そこに収益を生む仕組みを内包しながら、より戦略的に地域に価値を提供していくようなやり方を検討してもいいかもしれません。そこでは収益事業によって生み出された分によって施設の維持管

理の軽減が図られると同時に、収益事業自体にも、地域の起業家育成や産業支援の視点も組み合わせることで一石何鳥にもなる事業となる可能性すらあると考えます。

公民館の良さ

山下 公民館の強みは、常設の施設があること。先ほどのお話とか、今日の前半の話のような話をまず公民館がやれるのではないかと思います。私たち「まちカレ」は校舎を持たない経営的なことで、出ていける、出ていかにざるを得ないという状況がありますが、もし、常設の施設があったら、居場所づくりに取り組みたいです。

あともう1つの強みは、公民館には常駐で職員がいて、地域の課題をそこにいる人に相談できる。困ったことがあったら、その解決に向けた企画が生まれたり、人を紹介してもらえたり、まちの何でも相談所みたいな、インフォメーションセンターになり得る。そういうところが、私たちにはない良さですね。

牧野 活動していると、やはり居場所というか、たまり場はあったらいいなと思います。あれば、さまざまな団体がいろいろな活動をやろうと展開していくでしょうし、用事がなくてもそこに行けばだれかいて、お茶のみ話ができる。そこでいろいろなことを、ああでもない、こうでもないと話しているうちに、あれやろう、これやろうとなってくる。これが市民によるまちづくりの最も基本的なきっかけなのではないかと思います。そして、その場で、職員がひとりふたり相手をしてくれるといいなと思います。そこから市民は自分た

ちでまちを動かそうとするのです。そういう意味で、「まちカレ」と公民館は、もうちょっと有機的につながっていくといいと思います。山下 最近の流れでいうと、公共施設を維持できないという自治体が増えてきています。私は図書館のあり方についても提案してきました。建物を新設するよりは、商業施設への移転やリノベーションが注目されています。貸会場だったり、貸本屋となってしまった公民館や図書館の機能を、本来、何をすべき場所かということ、もういちど根本的に問い直していかなければなりません。そこから、やはり居場所が必要だとか、相談する人が必要だとか、本来の役割や機能を見直していく機会が必要です。

牧野 全国に公民館は約1万5,000館あるので、これだけあるものを使わない手はないと思うのですが、残念なことに、従来の「待っている姿勢」は変わらないのではないのでしょうか。使う側も行政サービスの提供と行使という枠組みで使っているところがあります。もっと市民自身が積極的、能動的にかかわって、市民が活動して、新しいまちをつくり出すというか、そういうことが求められると思います。

行政サービスを求めて、ああしてくれ、こうしてくれということではなくて、自分たちからかかわっていく人が増えていくことによって、いわゆる行政依存のまちのあり方ではなくて、自分たちがコミュニティをつくっていくという形に転換していく。そこに公民館がうまく位置づいていくといいなと思います。市民自身が、行政サービスを受けるだけの不自由な消極的な主人公ではなくて、まち

を自分たちの力でつくり出すようなもっと能動的な自由を行使できる主人公になる必要があるのではないのでしょうか。

左京 シブヤ大学には、自分が1人目の生徒になって授業をつくるというルールがあります。それは自らを学ぶ側に立たせるということです。一方で、社会教育主事講習等でも意見していますが、現在の生涯学習、社会教育に従事する方々というのは、どちらかと言えば教える側の立場になって企画しています。それがいまの市民のニーズにマッチする講座が企画できない根本的な理由としてあります。

シブヤ大学では、なぜ多くの企画ができるのか、そしてまたなぜ人が集うのかということ、そこでは学びたい人たちと一緒に学びたいことを具現化していくサイクルをつくり出しているからです。いまの公民館活用の話もそうですが、行政からの一方的なベクトルではなく、市民の側からのベクトルが出はじめている現状において、それをどのように引き出していくのか、市民の小さな声、潜在的なニーズをいかに可視化し、そこに応える事業を具現化していくかということが行政の今後の役割かもしれません。

牧野 そこでは職員の姿勢も大切で、いままでのように指導助言ということではなくて、住民の生活に寄り添っていく、住民のさまざまな立場にたって、住民の思いや願いを感じ取っていく、汲み取っていく、そしてそれを可視化して、住民に還すことで、住民の間に学びを組織していくということが必要だと思います。

とても刺激的な座談会でした。長時間ありがとうございました。

座談会を終えて



牧野 篤

楽しく刺激的な座談会でした。従来の公的社会教育の枠にとらわれないさまざまな「学び」の活動が、市民主導で生み出されています。その「学び」とは、趣味・教養を中心とした「教えてもらう」ことではなく、市民がお互いの関係をつくり、認め合い、自分を社会へと位置づけていくこと、そういう実践として展開されています。市民も行政サービスを待っている存在から自ら地域コミュニティを運営する主体へと、そのあり方を変えていく必要に迫られています。それは「自由」のあり方もかわります。待っている、クレームをつけるだけの、消極的な自由から、つくり出し、組み換えて、担っていく能動的な自由へ、市民のあり方も変わってきています。その一端が、「まちなかキャンパス」の取り組みでしょう。こういう取り組みと公民館が結びつくことで、「公」の意味も、自治的な意味合いを強めながら、市民が担うものへと変化していくのではないのでしょうか。



左京 泰明

全国に1万5,000もの数があると言われる公民館は一大公共資産であり、それが現在の市民のニーズに応え、これから地域活性化の拠点として機能すれば、それぞれの地域のビジョンを実現していくための強力なエンジンになることは間違いありません。大きな可能性を秘めた公民館の今後のあり方について、引き続き市民の視点で発想、実践していきたいと思います。ありがとうございました。



山下 洋輔

公民館と言うと施設を思い浮かべてしまいます。しかし、地域課題を自分たちで解決していくプロジェクトを支援し、民主的な社会を支える市民を育てていくことこそが、本来の公民館の役割と言えるのではないのでしょうか。

複雑に絡み合った問題に対話によってほぐし、組織を横断したプロジェクトが生まれるきっかけをつくり、長期にわたって、多様なステークホルダーが組織や立場を越えて知恵を持ち寄って社会課題を解決していく社会装置のような場を、公民館が担っていけるように提案していきたいと思います。

まちなかカレッジでの学びは、学校教育とは違い、高齢者の生きがいはもちろんのこと、地域への愛着を深めること、多様な地域課題を浮き彫りにすること、課題解決に取り組む経験をとおして学ぶこと、これから地域で活動する人材を発掘することといった、地域資源を引き出す重要な学びであり、地域をつくっていく学びであると、私は考えています。